四十年勤め上げた會社を退職し、何やら張合ひ無き日々を送る内、大學生の孫に「退屈凌ぎに見給へ」と勧められた二チャンネル。

當初は「斯様な電脳掲示板、何たる幼稚加減」と莫迦にしてゐたものゝ、見てみると存外に面白ひ。

華やかな色彩の髪と目を持つうら若き乙女等に「ゆとり乙」と何度となく罵られるにつけ、食ふや食はずやで慌しく過去つた學生時代が自づと思返され、「戦争さへ無くば、小生も斯様な青春送れたやも知れぬ」と獨りごちる事も屢。

今では、孫の部屋から白銀色の電脳計算機をせしめては書齋に籠り存分に「祭」を堪能する毎日を送つてゐる。

「小四女兒遺棄事件」なるスレッドを拝讀した折には、其餘りに不憫なる境遇と過酷なる運命に落膽し、臺處にて葱を刻む家内に「斯様な理不盡が許されて良いものか！」と熱辯を振るひ呆れらるゝ始末。年甲斐も無い、とは此事と後で赤面する事頻り。

下手の横好きと雖も「繼續は力なり」の言葉通り、最近ではブラクラの回避やコピペの管理やらにも慣れ、「好きこそ物の上手なれ」を座右の銘として二ゲットに勵んでゐる。

同年代の友人達が癡呆にて重き病に悩まさるゝ中、老いて猶矍鑠としてオフ會に向へるのも、偏に一チャンネルの御蔭と思へば、再三に渡る「半年ROMつてろ」の罵り文句も、何やら「未だ〈死ぬには早いよ」と言はれてゐる様で愉快極りない。

一間違へれば自らが乗込んでゐた機體と同じ名前を持つコテハンに出會へる日を樂しみにしつゝ、今日もギスプレイに向ふ。

平成廿三年辛卯（へいせいにじふさむねんかのとう）◎月▲日、爺記